

レンジャーの観察日記

このコーナーはビュー福島潟とNPO法人「ねとわーく福島潟」で担当しています。

見られる場所：潟中央カメラ・雁晴れ舎



オジロワシ (タカ目タカ科) 全長69~92センチメートル 日本で越冬する数550~850羽

今、福島潟ではワシ・タカ類がよく観察できます。トビ、オオタカ、ノスリ、チュウヒ、オジロワシ、チヨウゲンボウ。福島潟には、彼らが生きていくための食べ物も多い豊かな自然環境があるのです。国の天然記念物のオジロワシは、翼を広げると2メートル以上もありその名のとおり白い尾羽が特徴です。潟の中では最強の存在といえるでしょう。福島潟に毎年2羽が訪れ、華麗なハンティングシーンを見せてくれます。オジロワシは海ワシとも呼ばれ、海辺ではサケなどの大型魚を獲物としています。福島潟では水面にたくさんいるカモに上から襲いかかります。狩りは難しく、成功しても油断するとほかのワシ・タカ類やカラスが獲物を横取りしてしまいます。生きていくのって本当に大変ですね。

雁晴(がんば)れ舎で、1月と2月の第3、第4日曜日午前10時から正午まで、オオヒシクイ案内所を開設しますので、お気軽にお立ち寄りください。(ビュー福島潟、レンジャー 畠山)

市民の声

VOICE みんなの声

市長への便りから

「中央公民館にエレベーターの設置を」

(葛塚地区 70代 男性)

老人会の催し物は、中央公民館でよく開催されています。2階の大講堂が会場になると、階段を昇り降りしなくてはならないため、高齢者にとっては参加しづらいのが現状です。市の施設で、大勢の人が参加する会場ですので、ぜひエレベーターの設置を要望します。

貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。

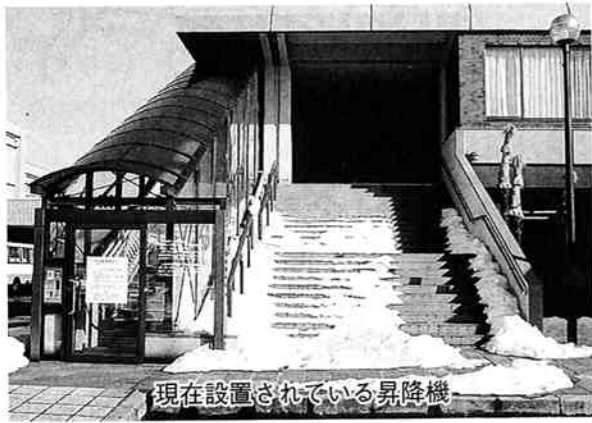
この要望は、昨年6月22日から7月1日まで開催された「とよさか星野富弘花の詩画展」(県内外から約1万6千人が入場)の際も出ていました。

現在、設置している外の障害者昇降機では、障害者や高齢者に対応しきれないと指摘を受けていました。市も必要性は、十分承知をしていますが、厳しい財政事情から予算のやりくりができませんでした。

今、平成15年度の予算編成に取り組んでいますが、エレベーターが設置できるように具体的な検討をしています。設置するには、市議会3月定例会で予算の議決を得る必要がありますので、もう少ししばらくお待ちください。

皆さんの声をお寄せください

「みんなの声」は、市民の皆さんのうれしこと、悲しいこと、新聞を読んだりテレビを見たりして感じたこと、市に対する意見などの意見発表の場です。思いつくまま皆さんの声をお寄せください。投稿は、郵送(手紙・はがき)か電子メールで、住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上お寄せください。お寄せいただいた原稿は、紙面の都合などで趣旨は変えずに内容を一部省略・変更することがあります。送りは、広報紙裏表紙をご覧ください。



現在設置されている昇降機

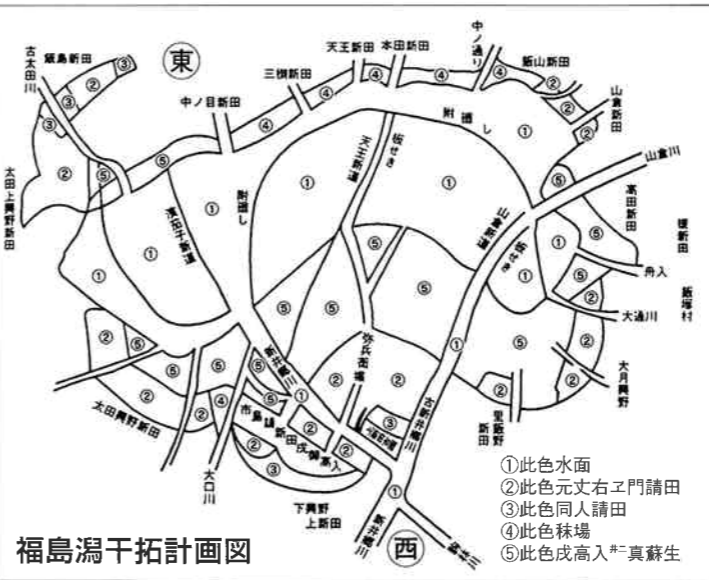
水原十三人衆の福島潟干拓

寛政2(1789)年、幕府は福島潟の開発権を新発田藩から取り上げ、水原町の市島徳次郎ら13人に与えました。彼らは、以後「水原十三人衆」と呼ばれました。

十三人衆は、福島潟からの排水量を増やし、干拓の速度を高めるため、大口川・古新発田川の川幅を、それぞれ6間(9メートル)に広げる河川改修を始めた。次いで、新井郷川の逆流を防ぐため、水はね工事を阿賀野川に行いましたが、逆流を止めることができず、福島潟の排水は進みませんでした。このため十三人衆は、福島潟の中で

も比較的干拓のしやすい場所から開発することに切り換えました。この方法は、まず開発予定地に囲い土手を築き、その強化のため土手の外にマコモを植え、ごみを付着させ、囲い土手の中の水を抜いて水田化を進め、囲い土手の中を開発し終えたら、また新しい囲い土手を作り、同じことを繰り返して開発しました。これは確実な開拓方法でしたが、予定地全体を干拓するには長い期間が必要でした。

文政6(1823)年、幕府は福島潟周辺8600石を新発田藩の預け地としました。藩では潟に流れ込む川の上流から土を流し込み、潟の底全体を浅くして排水を促進する「土流し手段」で開発を進めることとしました。土流しは、用水取り入れが終わる秋から冬ころまでの時期と、雪消えから用水取り入れまでの時期に行われました。さらに全領からもみ殻や糠(ぬか)を集め、潟に投入しました。



福島潟干拓計画図

この結果、開発が進展し、天保6(1835)年には452町歩の耕地の誕生が確認されました。しかし、実際には水が抜けず、耕地として利用されたのは明治10(1878)年代に排水機が設置されてからのことでした。(郷土史研究家 霧間)

開かれた学校をめざす



葛塚小学校 教頭 星川真一

「学校を開く」ということが言われて久しくなります。その意味するところは、多方面にわたりますが、この言葉一つで、学校の在り方のあらゆる部分について問い直すことができるようです。

学校の情報を開く

そこで、葛塚小学校で行われている「学校を開く」ころろみについて紹介したいと思います。3年前からPTA主催の地域文化祭を行って行っています。これは、佐藤前会長の「地域と学校が地域コミュニティの核になろう」という思いから始まりました。子どもたちが地域の人から伝統文化や匠の技と一緒に学び楽しむ文化祭を、PTAと学校と一緒に計画・実施しています。もちろん、まだ十分とは言えませんが、一人一人が主体的に参加し、かわる地域文化祭をめざしています。学校が、地域

地域に開かれた文化祭



評価を単なる不平不満のけ口に終わらせないで、互いに建設的な提言を受け渡すこと。このキャッチボールを通して、学校と保護者が開かれていく姿が具体的なものになっていくのではないのでしょうか。

教育コラム 私の実践・提言